

# 瓶詰地獄

夢野久作



拝呈 時下益々御清栄、けいがたてまつりそうろう 奉慶賀ふうこうが候。陳者、のぶれば 予てより御通

達の、潮流研究用と覚おぼしき、赤封蠟ふうろうろう附きの麦酒瓶ビール、拾得次第届告とどけつけ

仕る様、島民一般に申渡置もうしわたしおきそうろう候処、此程、本島南岸に、別小

包の如き、樹脂封蠟附きの麦酒瓶ビールが三個漂着致し居るを発見、

とどけいでもうしそうろう

届出 申候。右は何れも約半里、乃至ないし、一里余を隔てたる個

所に、或は砂に埋もれ、又は岩の隙間に固く挟まれ居りたるも

のにて、よほど以前に漂着致したるものらしく、中味も、御高

示の如き、官製端書はがきとは相見え、雑記帳の破片様のものらし

く候為め、御下命の如き漂着の時日等の記入は不可能と被ぞんぜられ為存

候。然れ共、尚何かの御参考と存じ、三個とも封瓶のまま、

村費にて御送附申上候間、何卒御落手相願度、此段得貴意

候 敬具

月 日

海洋研究所 御中

◇第一の瓶の内容

ああ……この離れ島に、救いの船がとうとう来ました。

大きな二本のエントツの舟から、ボートが二艘、荒波の上におろされました。舟の上から、それを見送っている人々の中にまじって、私たちのお父さまや、お母さまと思われる、なつかしいお姿が見えます。そうして……おお……私たちの方に向つて、白いハンカチを振って下さるのが、ここからよくわかりま

す。

お父さまや、お母さまたちはきつと、私たちが一番はじめに出した、ビール瓶の手紙を御覧になつて、助けに来て下さつたに違いありません。

大きな船から真白い煙が出て、今助けに行くぞ……というように、高い高い笛の音が聞こえて来ました。その音が、この小さな島の中の、禽鳥や昆虫を一時に飛び立たせて、遠い海中に消えて行きました。

けれども、それは、私たち二人にとって、最後の審判の日の籬よりも怖ろしい響で御座いました。私たちの前で天と地が裂けて、神様のお眼の光りと、地獄の火焰が一時に閃めき出たように思われました。

ああ。手が慄えて、心が倉皇て書かれませぬ。涙で眼が見え

なくなりませす。

私たち二人は、今から、あの大きな船の真正面に在る高い崖の上に登つて、お父様や、お母様や、救いに来て下さる水夫さん達によく見えるように、シツカリと抱き合つたまま、深い淵の中に身を投げて死にます。そうしたら、いつも、あそこに泳いでいるフカが、間もなく、私たちを喰べてしまつてくれるでしょう。そうして、あとには、この手紙を詰めたビール瓶が一本浮いているのを、ボートに乗っている人々が見つけて、拾い上げて下さるでしょう。

ああ。お父様。お母様。すみません。すみません、すみません、すみません。私たちは初めから、あなた方の愛子いとしいこでなかつたと思つて諦あきらめて下さいませ。

又、せつかく、遠い故郷ふるさとから、私たち二人を、わざわざ助けに

来て下すつた皆様の御親切に対しても、こんなことをする私たち二人はホントにホントに済みません。どうぞどうぞお赦ゆるし下さい。そうして、お父様と、お母様に懐いだかれて、人間の世界へ帰る、喜びの時間が来ると同時に、死んで行かねばならぬ、不倖ふしあわせな私たちの運命を、お矜恤われみ下さいませ。

私たちは、こうして私たちの肉体と靈魂たましいを罰せねば、犯した罪の報償つぐないが出来ないのです。この離れ島の中で、私たち二人が犯した、それはそれは恐ろしい悖戾よこしまの報責むくいなのです。

どうぞ、これより以上うえに懺悔ねがすることを、おゆるし下さい。私たち二人はフカの餌食になる価打ねうちしか無い、狂妄しれものだったのですから……。

ああ。さようなら。

神様からも人間からも救われ得ぬ

哀しき二人より

お父様

お母様

皆々様

◇第二の瓶の内容

ああ。隠微<sup>かくれ</sup>たるに鑒<sup>み</sup>たまう神様よ。

この困難<sup>くるしみ</sup>から救われる道は、私が死ぬよりほかに、どうしても無いので御座<sup>あしだい</sup>いませうか。

私たちが、神様の足<sup>あしだい</sup>凳と呼んでいる、あの高い崖の上に私が

たつた一人で登つて、いつも二、三匹のフカが遊び泳いでいる、あの底なしの淵の中を、のぞいてみた事は、今までに何度あつたかわかりませぬ。そこから今にも身を投げようと思つたことも、いく度たびであつたかわかれませぬ。けれども、そのたんびに、あの憐憫あわれなアヤ子の事を思い出しては、靈魂たましいを滅亡ほろぼす深いため息をしいしい、岩の圭角かどを降りて来るのでした。私が死にましたならば、あとから、きつと、アヤ子も身を投げるであらうことが、わかり切つているからでした。

\*

私と、アヤ子の二人が、あのボートの上で、附添ばあやいの乳母ばあや夫妻や、センチョーサンや、ウンテンシユさん達を、波なみに浚さらわれ

たまま、この小さな離れ島に漂れついでから、もう何年になりましようか。この島は年中夏のように、クリスマスもお正月も、よくわかりませぬが、もう十年ぐらい経っているように思います。

その時に、私たちが持っていたものは、一本のエンピツと、ナイフと、一冊のノートブックと、一個のムシメガネと、水を入れた三本のビール瓶と、小さな新約聖書が一冊と……それだけでした。

けれども、私たちは幸福でした。

この小さな、緑色に繁茂り栄えた島の中には、稀に居る大きな蟻のほかに、私たちが憂患す禽、獣、昆虫は一匹も居ませんでした。そうして、その時、十一歳であつた私と、七ツになつたばかりのアヤ子と二人のために、余るほどの豊饒な食物が、

みちみちておりました。キュウカンチョウだの鸚鵡おうむだの、絵でしか見たことのないゴクラク鳥だの、見たことも聞いたこともない華麗はなやかな蝶だのが居りました。おいしいヤシの実だの、パイナップルだの、バナナだの、赤と紫の大きな花だの、香気かおりのいい草だの、又は、大きい、小さい鳥の卵だのが、一年中、どこかにありました。鳥や魚などは、棒切れでたたくと、何ほどでも取れました。

私たちは、そんなものを集めて来ると、ムシメガネで、天日てんびを枯れ草に取って、流れ木に燃やしつけて、焼いて喰べました。そのうちに島の東に在る岬いさと磐いわの間から、キレイな泉が潮の引いた時だけ湧わいているのを見付けましたから、その近くの砂浜の岩の間に、壊れたボートで小舎こやを作つて、柔らかい枯れ草を集めて、アヤ子と二人で寝られるようにしました。それから

小舎こやのすぐ横の岩の横腹を、ボートの古釘で四角に掘って、小さな倉庫くらみたようなものを作りました。しまいには、外衣うわぎも裏衣したぎも、雨や、風や、岩角に破られてしまつて、二人ともホントのヤバン人のように裸体はだかになつてしまいましたが、それでも朝と晩には、キット二人で、あの神様の足凳あしだいの崖に登つて、聖書バイブルを読んで、お父様やお母様のためにお祈りをしました。

私たちは、それから、お父様とお母様にお手紙を書いて大切なビール瓶の中の一本に入れて、シツカリと樹脂やにで封じて、二人で何遍も何遍も接吻くちづけをしてから海の中に投げ込みました。そのビール瓶は、この島のまわりを環めぐる、潮うしおの流れに連れられて、ズンズンと海わたなか中遠く出て行つて、二度とこの島に帰つて来ませんでした。私たちはそれから、誰かが助けに来て下さる目標めじるしになるように、神様の足凳あしだいの一番高い処へ、長い棒切れを樹たてて、

いつも何かしら、青い木の葉を吊しておくようにしました。

私たちは時々争論いさかいをしました。けれどもすぐに和平なかなおりをして、

学校ゴツコや何かをするのでした。私はよくアヤ子を生徒にして、聖書の言葉や、字の書き方を教えてやりました。そうして二人とも、聖書を、神様とも、お父様とも、お母様とも、先生とも思つて、ムシメガネや、ビール瓶よりもズツト大切にして、岩の穴の一番高い棚の上におきました。私たちは、ホントに幸福しあわせで、平安やすらかでした。この島は天国のようでした。

\*

かような離れ島の中の、たった二人切りの幸福しあわせの中に、恐ろしい悪魔が忍び込んで来ようと、どうして思われましょう。

けれども、それは、ホントウに忍び込んで来たに違いないの  
でした。

それはいつからとも、わかりませんが、月日の経つのにつれ  
て、アヤ子の肉体が、奇蹟のように美しく、麗沢つややかに長そだつて行く  
のが、アリアリと私の眼に見えて来ました。ある時は花の精の  
ようにまぶしく、又、ある時は悪魔のようになやましく……そ  
うして私はそれを見ていると、何故かわからずに思念おもいが朦朧くらく、  
哀しくなつて来るのでした。

「お兄さま……………」

とアヤ子が叫びながら、何の罪穢けがれもない瞳めを輝かして、私の  
肩へ飛び付いて来るたんびに、私の胸が今までとはまるで違つ  
た気もちでワクワクするのが、わかつて来ました。そうして、  
その一度一度毎ごとに、私の心は沈淪ほろびの患難なやみに付わたされるかのよう

畏懼<sup>おそ</sup>れ、慄<sup>ふる</sup>えるのでした。

けれども、そのうちにアヤ子の方も、いつとなく態度<sup>ようす</sup>がかわつて来ました。やはり私と同じように、今までとはまるで違つた……もつともつとなつかしい、涙にうるんだ眼で私を見るようになりました。そうして、それにつれて何となく、私の身体<sup>からだ</sup>に触<sup>さわ</sup>るのが恥かしいような、悲しいような気もちがするらしく見えて来ました。

二人はちつとも争論<sup>いさかい</sup>をしなくなりました。その代り、何となく憂容<sup>うれいがお</sup>をして、時々ソツと嘆息<sup>ためいき</sup>をするようになりました。それは、二人切りでこの離れ島に居るのが、何ともいいようなのはいくらいい、なやましく、嬉しく、淋しくなつて来たからでした。そればかりでなく、お互いに顔を見合っているうちに、眼の前が見る見る死蔭<sup>かげ</sup>のように暗くなつて来ます。そうして神様のお

啓示しめしか、悪魔の戯弄からかいかわからないままに、ドキンと、胸とどろが轟く  
と一緒にハツと吾われに帰るような事が、一日のうち何度となくあ  
るようになりました。

二人は互いに、こうした二人の心をハッキリと知り合ってい  
ながら、神様の責罰いましめを恐れて、口に出し得ずにいたのでした。  
万もし一、そんな事をし出かしたアトで、救いの舟が来たらどうし  
よう………という心配に打たれていることが、何にも云わな  
いままに、二人同志の心によくわかつていたのでした。

けれども、或る静かに晴れ渡った午後の事、ウミガメの卵を  
焼いて食べたあとで、二人が砂原に足を投げ出して、はるかか  
海の上を迂すべって行く白い雲を見つめているうちにアヤ子はフイ  
と、こんな事を云い出しました。

「ネエ。お兄様。あたし達二人のうち一人が、もし病気になつ

て死んだら、あとは、どうしたらいいでしょうネエ」

そう云ううちアヤ子は、面を真赤かおにしてうつむきまして、涙をホロホロと焼け砂の上に落しながら、何ともいえない、悲しい笑い顔をして見せました。

\*

その時に私が、どんな顔をしたか、私は知りませぬ。ただ死ぬ程息苦しくなつて、張り裂けるほど胸が轟いて、唾のように何の返事もし得ないまま立ち上りますと、ソロソロとアヤ子から離れて行きました。そうしてあの神様の足あしだいの上に来て、頭を掻かき撈むしり掻かき撈むしりひれ伏しました。

「ああ。天にまします神様よ。

アヤ子は何も知りませぬ。ですから、あんな事を私に云つたのです。どうぞ、あの処女むすめを罰しないで下さい。そうして、いつまでもいつまでも清浄きよらかにお守り下さいませ。そうして私も……………。

ああ。けれども……………けれども……………。

ああ神様よ。私はどうしたら、いいのでしょうか。どうしたらこの患難なやみから救われるのでしょうか。私が生きておりますのはアヤ子のためにこの上もない罪悪つみです。けれども私が死にましたならば、尚更なおさら深い、悲しみと、苦しみをアヤ子に与えることになりません、ああ、どうしたらいいのでしょうか……………。

おお神様よ……………。

私の髪毛かみのけは砂にまみれ、私の腹は岩に押しつけられております。もし私の死にたいお願いが聖意みこころにかないましたならば、只

今すぐに私の生命を、燃ゆる閃電にお付し下さいませ。

ああ。隠微たるに鹽給まう神様よ。どうぞどうぞ聖名を崇めさせ給え。み休徴を地上にあらわし給え……………」

けれども神様は、何のお示しも、なさいませんでした。藍色の空には、白く光る雲が、糸のように流れているばかり……………崖の下には、真青く、真白く渦捲きどよめく波の間を、遊び戯れているフカの尻尾やヒレが、時々ヒラヒラと見えているだけです。

その青澄んだ、底無しの深淵を、いつまでもいつまでも見つめているうちに、私の目は、いつとなくグルグルと、眩暈めき初めました。思わずヨロヨロとよろめいて、漂い碎くる波の泡の中に落ち込みそうになりましたが、やつとの思いで崖の端に踏み止まりました。……………と思う間もなく私は崖の上の一番高

い処まで一跳びに引き返しました。その絶頂に立つておりました棒切れと、その尖端さきに結びつけてあるヤシの枯れ葉を、一思ひとおもいに引きたおして、眼の下はるかかぬ淵に投げ込んでしまいました。

「もう大丈夫だ。こうしておけば、救いの船が来ても通り過ぎて行くだろう」

こう考えて、何かしらゲラゲラと嘲り笑いながら、残狼おおかみのように崖を馳け降りて、小舎こやの中へ馳け込みますと、詩篇の処を開いてあつた聖書を取り上げて、ウミガメの卵を焼いた火の残りの上に載せ、上から枯れ草を投げかけて焰を吹き立てました。そうして声のある限り、アヤ子の名を呼びながら、砂浜の方へ馳け出して、そこいらを見まわしました………が………。

見るとアヤ子は、はるかに海の中に突き出ている岬の大磐おおいわの

上に跪ひざまずいて、大空を仰ぎながらお祈りをしているようです。

\*

私は二足三足うしろへ、よろめきました。荒浪に取り捲かれた紫色の大磐おおいわの上に、夕日を受けて血のように輝いている処女おとめの背中こうごうの神々しさ……………。

ズンズンと潮うしおが高まつて来て、膝かひの下の海藻かいそうを洗い漂わしているのも心付かずに、黄金色こがねいろの滝浪たきなみを浴びながら一心に祈っている、その姿けだかの崇高たかさ……………まぶしさ……………。

私は身体からだを石のように固こわばらせながら、暫しばらくの間、ボンヤリと眼をみはっております。けれども、そのうちにフィツと、そうしているアヤ子の決心がわかりますと、私はハツとして飛

び上がりました。夢中になつて馳け出して、貝殻ばかりの岩の上を、傷だらけになつて迂りながら、岬の大磐の上に這い上りました。キチガイのように暴れ狂い、哭き喚ぶアヤ子を、両腕にシツカリと抱き抱えて、身体中血だらけになつて、やつとの思いで、小舎の処へ帰つて来ました。

けれども私たちの小舎は、もうそこにはありませんでした。聖書や枯れ草と一緒に、白い煙となつて、青空のはるか向うに消え失せてしまつていたのでした。

\*

それから後の私たち二人は、肉体も靈魂も、ホントウの幽暗に逐い出されて、夜となく、昼となく哀哭み、切齒しなければ

ならなくなりました。そうしてお互い相抱き、慰さめ、励まし、祈り、悲しみ合うことは愚か、同じ処に寝る事さえも出来ない気もちになつてしまつたのでした。

それは、おおかた、私が聖書を焼いた罰なのでしよう。

夜になると星の光りや、浪の音や、虫の声や、風の葉ずれや、木の実の落ちる音が、一ツ一ツに聖書の言葉を叫なやきながら、私たち二人を取り巻いて、一步一步と近づいて来るように思われるのでした。そうして身動き一つ出来ず、微睡まどろむことも出来ないままに、離れ離れになつて悶もたえている私たち二人の心を、窺視うかがいに来るかのように物怖ろしいのでした。

こうして長い長い夜が明けますと、今度は同じように長い長い昼が来ます。そうするとこの島の中に照る太陽も、唄う鸚鵡おうむも、舞う極楽鳥も、玉虫も、蛾も、ヤシも、パイナップルも、花

の色も、草の芳香かおりも、海も、雲も、風も、虹も、みんなアヤ子の、まぶしい姿や、息苦しい肌の香かとゴツチャになって、グルグルグルと渦巻き輝やきながら、四方八方から私を包み殺そうとして、襲いかかって来るように思われるのです。その中から、私とおんなじ苦しみに囚とらわれているアヤ子の、なやましい瞳めが、神様のような悲しみと悪魔のようなホホエミとを別々に籠こめて、いつまでもいつまでも私を、ジイツと見つめているのです。

\*

鉛筆が無くなりかけていますから、もうあまり長く書かれません。

私は、これだけの虐待なやみと迫害くるしみに会いながら、なおも神様の禁責いましめを恐れている私たちのまごころを、この瓶に封じこめて、海に投げ込もうと思つてゐるのです。

明日あしたにも悪魔の誘惑いざないに負けるような事がありませぬうちに……

……………。

せめて二人の肉体からだだけでも清浄きよらかでありますうちに……。

\*

ああ神様……………私たち二人は、こんな苛責くるしみに会いながら、病氣一つせず、日に増まし丸々と肥つて、康強すこやかに、美しく長そだつて行くのです、この島の清らかな風と、水と、豊穰ゆたかな食物かてと、美しい、楽しい、花と鳥とに護られて……………。

ああ。何という恐ろしい責め苦でしょう。この美しい、楽しい島はもうスツカリ地獄です。

神様、神様。あなたはなぜ私たち二人を、一思いに屠殺ころして下さらないのですか……………。

——太郎記す……………

◇第三の瓶の内容

オ父サマ。オ母サマ。ボクタチ兄ダイハ、ナカヨク、タツシヤニ、コノシマニ、クラシテイマス。ハヤク、タスケニ、キテクダサイ。



# 瓶詰地獄

底本：「夢野久作怪奇幻想傑作選 あやかしの鼓」角川ホラー文庫、角川書店

1998（平成 10）年 4 月 10 日初版発行

初出：「猟奇」

1928（昭和 3）年 10 月

入力：林裕司

校正：浜野 智

1998 年 11 月 10 日公開

2003 年 10 月 15 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。